

GOTH Over the Grave

しまりんだんご

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「明日の土曜、森野夜はこの駅のホームで殺される」

八月のある日、僕は森野とともに死体を探しに山へ向かった。同日、朝永寛一（あさながひろかず）は駅で森野の姿を垣間見る。密かに森野を狙い、その命を奪おうと企む。一方、僕は森野に迫る何者かの存在に気づく。そして十一月下旬の土曜、約束の日を迎えた。

### \*ご注意

本作品は乙一著『GOTH リストカット事件』の二次創作小説です。原作小説・番外編・実写映画版・漫画版の要素を盛り込んだ作品のため、重大なネタバレ要素が含まれています。原作未読の方は先に原作を読むことをお勧めいたします。

また、本作品はFC2ブログとのマルチ投稿です。こちらには加筆修正版を投稿いたします。

# 目次

プロローグ	Over the Grave	1
第1話	8月／11月(月)	3
第2話	11月(金)	9
第3話	9月	12
第4話	10月	15
第5話	10月	19
第6話	11月(水)	23
第7話	11月(水)	27
第8話	11月(木)	32
第9話	11月(金)	37
第10話	11月(土)	41
第11話	11月(土)	46
第12話	11月(土)	53
エピローグ	A Voice from the Grave	56

# プロローグ — Over the Grave —

11月14日（後）

……もし駅のホームから転落したら人はどうなるだろう。

一見すると背丈より低いホームをよじ登るのは簡単に思えるだろう。ところが人間は意外と自分の体を両腕の力で持ち上げることが難しいものだ。それにホームから転落したことで頭はパニックに陥っている。無駄な焦りは体のこわばりを生み、這い上がることでより困難になる。電車が猛スピードで近付いて来ようものなら尚更だろう。その先に待ち受けているのは、逃れようのない運命だ。

私は考えた。人を線路に突き落とすとしたらホーム上のどこが一番だろうかと。来る日も来る日も同じ駅を利用しながら、私は考え続けた。ホーム上にいる人の視線や監視カメラをかくぐるための策はないかと。

結論から言うと、狙う相手がホームの先端部分に立った場合が最も成功に近い。

駅のプラットホームは両サイドを電車が行き来する島状の形を成している。当然、ホーム上には無数の人の視線が行き交う。

しかしホームの先端エリアだけは違う。そこは一階の改札口へと降りる階段の向こう側にあり、閑散としている。階段の近くには自販機とベンチもあるため、ホーム中央エリアからの人の視線が遮られることになる。また、幸運にも監視カメラからの位置が遠く、映像は不鮮明になることがわかった。そこは最も実行に相応しいポイントだといつていいだろう。

警察に捕まるリスクは高い。

しかし、もし運命が私に味方するのなら、私は逃げおおせ、『撮影』は成功するにちがいない。

—— ファイル名『Grave』 ——

『……次のニュースです。先日、立て続けに発生した殺人事件について

て、警察は会見を開き、同一人物による犯行と発表しました』

自室の机でデジカメのバッテリーを確認していた男の耳に飛び込んできたのは、話題の殺人事件に関する朝のニュースだった。

『また、会見では二人の被害者の身元も公表しております。被害者の名前は楠田光恵さん、中西香澄さん。警察は二人を殺害した犯人の正体を追うと共に、二人の女子高生に関する目撃情報を募っています……』

古いテレビのくぐもった音声で、男の暮らすアパートの一室に響く。

いま、この連続殺人事件のことを知らぬ者はいないだろう。その類を見ない猟奇性が世間の関心を惹きつけてやまなかったからだ。

この瞬間も犯人は、社会のどこかで息をひそめているのだろう。次の標的を探しながら……。

男はデジカメの脇にある大きな写真立てに目を向けた。

机の上に飾っているその写真は昔撮影されたものだった。

それはかつて自らが駅のホームで突き落とした少女だった。

写真の中で、今も彼女は屈託のない笑顔をこちらに向けている。

その男、朝永寛一（あさながひろかず）はしばらく写真を眺めた後、この日の仕事の支度にとりかかった。

# 第1話：8月／11月（月）

1

駅前ロータリーは焼けきるような八月の暑さに包まれていた。

このところ、スーツ姿のサラリーマンはめつきりと数を減らし、つかの間の休みを謳歌する人々が薄手の服装でロータリーにあふれ返っている。

そんな光景を朝永は歩きながら漫然と見つめていた。彼にはこの日も学習塾講師としての仕事待ち構えている。休みがないのは受験生だけではない。そしてその仕事場へ行くためには、人の行き交うこのターミナル駅を利用しなくてはならなかった。

朝永の自宅は駅の裏手にあつた。自宅から改札口に辿りつくまでそう遠い距離ではない。しかし雑踏の中をかき分けて歩くだけで、真夏の日差しは容赦なく彼を照り付け、全身から汗が絶え間なく噴き出す。

人の活き活きとした表情を目にするたびに朝永は思う。彼らは自分と違う世界を生きているにちがいないと。休みを謳歌する彼らへの嫉妬がそう思わせるのかもしれない。しかしもっと奥深くの、なにか根本的な部分で、彼らが自分と違う人種のように見えてならなかった。

今、世間を騒がせている連続殺人犯もきつと同じ思いを抱いているに違いない。

やがて駅の改札口へ辿り着いた。

駅は巨大なビルの一階部分にあつた。敷地の一部をくりぬくようにして線路を通し、ひっきりなしに電車が往来する、少し特殊な構造となっている。

駅の階段からプラットホームに上がる。二階部分に相当するホームはいつも混雑していた。朝永と同じように電車を待つ客が、行儀よく列を成していた。

朝永は列の後ろに付いて、いつものように周囲の様子を観察する。隣同士で談笑を交わす二人組の学生、新聞を器用に折り曲げてしかめ

面で読みふける中年の男、しきりに駅の発着時刻を気にする旅行用のトランクを持った若い女。

ふと、列の先頭で携帯電話に目を落としている若い男の姿が目に入った。

彼はホーム端のほんの数センチ手前に立ち、小さな画面の中に夢中になっている。

そしてその身体の背後は無防備だ。

……いつからだろうか、発作のような衝動に駆られるようになったのは。

それは無邪気な子供の悪戯と本質的には同じだろう。

だが、無防備な人間をホームの下に突き落とす事は限りなく残酷な悪戯にちがいがなかった。

『……間もなく、一番線に電車が参ります。白線の内側でお待ちください……』

ほどなくしてアナウンスがホームに響き渡った。乗客の視線が一斉に列車の方向へ流れる。

朝永は何気なく、その真逆に目をやった。

それはほんの気まぐれからだった。

結果、いつもと異なる動作を取り入れたことで、誰も見ないであろう人のいないスペースに目を向ける事となる。

視線の先、ホームの端にぽつんと立つ少女の姿を見た。

まるで人を嫌うかのような場所に、こちらから背を向けて力なく立っていた。朝永とは反対側の、S山方面の電車を待ちながら、本を読んでいるようだった。黒く長い髪に、これまた漆黒に包まれた服装が同調する。華奢なシルエットを浮かび上がらせていた。

不意にけたたましい警笛が耳を貫いた。

少女が顔を上げて振り向いた。その端正な顔立ちが朝永の目に映る。

一瞬だけ、目が合った気がした。

風が勢い良く舞った。

朝永の目の前を無骨なデザインの車両が勢いよく到来し、徐々にス

ピードを落としていく。

ブレーキの音が響き、何事もなくドアが開く。

朝永はその場に立ち止まってしまったかった。しかし電車に乗り込もうとする人の流れに押されて止まっては行られない。その結果、彼は運悪く車両の中央に押し込まれる。このままでは少女の姿が見えない。人の姿に隠れて窓の外すら見えない位置でもがき、崩れた体勢を立て直そうとする。しかし無情にも扉は閉まり、あつという間に発車してしまった。

景色は後ろに流れ、ようやく朝永が姿勢を整えた時には、既に電車は駅を離れていた。

だが最後に見た光景だけは目に焼き付いていた。

それからしばらく経った頃、水口ナナミという少女の死体が山の中で発見された。

世間では何者かによる殺人事件が立て続けに発生していた。その矢先に新たな犠牲者である。発見現場はS山、つまりあの日、黒の少女が電車を待っていた行き先にある山だった。

朝永は一瞬、心のどこかで不安に駆られた。もしや彼女が被害に遭ったのでは……。

しかしその不安は杞憂に終わる。テレビに映し出された被害者の顔写真が全くの別人だったからだ。もつとも、何となくあの少女も事件に絡んでいるようにも思えた。

それ以降、事件の報道に対する興味は失われた。代わりに朝永の頭を占めていたのは、あの幽玄な雰囲気をもった少女の姿。

忘れられない光景だった。

叶うならもう一度会ってみたい。そして……。

月日が流れ、九月。

それは空の澄みわたる日のことだった。



雲ひとつない良く晴れた十一月の月曜日だった。

いつものように放課後が訪れて、薄情な生徒たちは檻から解き放たれた囚人のように教室を離れていく。五分ほど経った頃、教室には日直の当番となった森野夜と、「先生から頼まれごとがある」と友人に騙った僕だけが残った。

「帰らないの？」 森野は言った。

「たまには羽を休めようと思って」

そう、と森野はそっけなく返す。特に興味もない様子だった。僕は窓際の席で夕日の沈みゆくグラウンドを眺めていた。この日は部活動がなかった。

時折、僕は意味のない行動に駆りたてられることがあった。

それはある種の休息というものだ。日常の中でごく普通のクラスメイトを演じることをやめて、一人でいたい時がある。

ふいに森野は教室の窓を開けた。深まる秋の風がなだれ込み、十一月が半ばを過ぎたことを僕に実感させる。

「少し失礼するわ」

そう言うとき森野は両手にチョークの粉が付いた黒板消しを携えた。開けた窓の外に向かって叩き落とそうとしているのだろう。だが力の足りない叩かれ方をしたチョークの粉は、吹きすさぶ風に舞って森野の喉を咳き込ませた。彼女は不器用だった。

僕は無視して席を立った。

「ちよつと待って」 涙目交じりに森野が言った。「あなたに、渡したいものがあるの、思い出した」

「無理して喋らなくてもいいよ」

森野は自分の鞆から本を取り出した。

「あなたが前から探していた本を見つけたの」 喉の調子を取り戻したようだった。

「これをどこで？」

「駅前にある本屋よ。場所はあなたも知ってるでしょ？ 在庫セールのワゴンにあったわ」

それはスナッフフィルムの存在に関する本だった。

スナッフフィルム、とはつまり殺人ビデオのことだ。そして、娯楽用途で殺人の様子を撮影した映像作品が今ネットのどこかに存在するという。表で流通することは決してないだろうが、僕はいつかその映像を見てみたいと思っていた。

そのことを森野に話したのは八月の半ばだった。連続殺人事件が巷を賑わす中、駅前のマクドナルドで水口ナナミに成りきった森野と会った時のことだ。それを彼女は気まぐれに覚えていたのだろう。

「君は、殺人ビデオに興味ある？」

「面白いと思うわ」

森野は淡々と言った。

「どうして？」

「だって、人間が死にゆく過程を繰り返し返しビデオで視聴できるからよ。なかでも私が特に見たいと思うのは、そうね……死ぬ瞬間の、人間の表情かしら」

同意、と僕は答えた。

僕たちはこういう猟奇的な話を好んでしていた。持つて生まれた性質がそうさせるのだろう。したがって、僕も森野も、普通の人たちと違う世界に生きている自覚はあった。

「……ああ、そうだ森野」

しばらく本を見つめて、僕は切り出した。

「ちやうど犯罪心理学の展示会チケットが二枚余っててね。一枚は僕が使うつもりだけど、もう一枚よければどう？」

新聞の講読特典についてきた無料チケットだった。妹がチケットショップに売ろうと企んでいたのを、僕が勝手に持ってきたものだ。「珍しいわね」森野は首を傾げた。

「この本のお礼代わりだ。不要なら返してくれて構わない」

渡したチケットを森野はじつと見つめる。小声で何かを口にしていくようだった。

「会場は……電車で行くしかないわね……」

どうやら彼女の興味を満たすものだったらしい。以前僕たちが死体を探しに向かったS山と反対方面の電車に乗ればいいと伝えた。

「少し面倒ね。でも電車は嫌いではないわ」

「どうして？」

「凶悪な犬が乗らないからよ」

森野はそう答えた。逃げ場のない電車で盲導犬と出くわした時どうなるか僕は想像した。

この世には殺す人間と殺される人間が存在する。

社会に溶け込みながら、心の奥底で決して人と交わらないテリトリーを持つ異常者。そんな怪物のような彼らは、時として気まぐれに一線を踏み越えて世間を震撼させてきた。

僕もまた彼らと同じカテゴリーにある人種だった。それでいて僕は、これまで何人もの異常者たちを見てきた。

彼らと対峙するうちに気づいたことがある。それは彼らの瞳に、常人とは違う狂気を宿していることだ。むき出しの狂気を放つ者もいれば、うまく隠して日常の中に生きる者もいる。しかし自覚のあるなしに関わらず、彼らが常に獲物を探していることに変わりはない。

今もなお、名も知らぬ彼らは社会のどこかに潜んでいる。

## 第2話：11月（金）

3

はじめて森野と出会ったのは今年の春だった。

「私にも、その表情のつくりかたを教えてください？」

周囲に偽りの自分を演じていた僕を見破るように彼女はそんなことを言ってきた。それは友人とも呼べないような奇妙な関係のはじまりだった。以来僕は、彼女と話をするときだけ日常生活での演技から解放された。

彼女と接しているうちに僕はあることに気がついた。それは森野の奇妙な体質についてだ。彼女は異常者を引き寄せる体質を持っていた。普通の人間なら気味が悪いと思うだろう。しかし僕にとつてはさほど驚く事でもなかった。なぜなら僕の妹も死体を発見してしまう特殊な才能の持ち主だと知っていたからだ。

むしろ僕はその体質を利用してきたといえる。つまり彼女の傍らに身を置くことで、これまで幾人もの異常者と遭遇してきたということだ。

9

二階の自室から出て階段を降りると厚着をした妹と出くわした。

「おはよう兄さん」妹の桜は言った。「最近また夜遅いよね。どこで何やってるの?」

コンビニだよ、と適当に答えた。桜はこれから朝の日課である犬の散歩に出かけるところだった。十一月も終わりが近く、このところ朝は冷え込む。そのため彼女は防寒対策としてマフラーに手袋を身に着けていた。

リードを持った桜が玄関から犬を呼ぶと、庭先から一匹のゴールドエンレトリバーが現れた。その犬、ユカは静かな足取りで妹の元にやって来た。

「いい子だね」妹がリードの首輪を装着する間、ユカの視線は僕を捉えていた。その理知的な瞳で僕とあいさつを交わしているように見える。複雑な事情で引き取った犬だが、その賢さには僕も目を見張るば

かりだった。

桜たちを見送った後リビングへ向かう。母が朝食の支度をしている所だった。

「そういえばあんたのクラスメイトの子、まだ見つかってないんだっけ？」あいさつを交わすなり母は言う。「恋人がいたそうだけど、その子も一緒にいないって聞いたわ」

母が指摘しているのは半月ほど前に起きた失踪事件のことだ。そして僕はその事件に深く関わりがある。だがこのことは僕と犯人の男を除いて誰も知らない。

「きつと大丈夫だよ。彼らの行方はそのうちわかるから」  
「そうだといいわねえ」

母は大して心配していないらしくかった。ドラマによくある駆け落ち話のように捉えているのだろうか。

僕は手早く朝食を済ませて二階の自室へ戻った。

部屋は薄暗く、静けさを保っていた。閉め切ったカーテンの隙間から朝の日差しが射し込み、机の上の透明なディスクケースに反射する。

僕は部屋の片隅の本棚に目を向けた。

本を何冊か取り払うと、その奥から一式のナイフセットが姿を現した。

僕はそのうちの一本を取り出し、刃を覗き込んだ。

そのナイフセットはかつて、ある殺人犯の家から持ち出してきたものだった。殺人に使用されたもので、僕が記念に持ち帰ったものだ。

もともとナイフは二十三本あったが、そのうちの一本はユカを家に引き取る時と前後してすでに僕の手から離れたため、今手元にあるのは二十二本となる。

当然ながら、全てのナイフが殺人に使われたわけではないだろう。しかし、そのうちの何本かは確実に人間の血の味を覚えていて、僕には不思議とそれを見分けることができた。そして一度でも血を吸ったそれは、ときおり意思を持つかのように、自らの枯渴を訴えている。もちろんそれは錯覚にちがいない。しかし、僕は鈍い輝きを放つナ

イフに触れる度に、これらはいつかどこかで使われる運命にあると感じた。

階下から物音がした。桜が犬の散歩を終えたらしい。僕はナイフを鞆に入れて支度を始めた。

---

舞台は整った。

明日土曜の朝、森野夜は殺害される。

### 第3話：9月

4

起床した朝永は部屋の窓を開けた。涼風が頬をくすぐる。セミの声は消え、夏が過ぎ去ったことを感じさせた。九月になってようやく、月に一度の休日だ。

朝永はテレビのスイッチを入れた。

『……昨日の朝、玄関先で人が倒れているという近所の住民からの通報がありました……』

男のアナウンサーがこの近くの町の名前を告げる。どうやら自宅で男が心臓にナイフを突き刺された事件らしかった。関連してその家に住む少女が郊外の荒地で保護されたという。

少女、と聞いて朝永の体がこわばった。だがテレビの情報から伝わる少女の年齢を聞いて安堵する。九歳の子供だったからだ。

自分は一体何を考えているんだろう、と朝永は自分自身に呆れたように呟いた。

それほどまでに、あの夏の日に遭遇した少女のことが頭にこびりついて離れないのだろうか。

確かに、会いたくないと言えようそになる。だが自分でもその理由がわからない。

朝食を摂ろうと冷蔵庫を開ける。ところが、ろくなものが入っていない。人間の手でも入っていた方がましな状態だった。

大きいため息を吐く。昨日、帰りがけに買いこんでおかなかったことを後悔していた。

「六時半か……この時間だと駅前のコンビニまで繰り出すしかないな」

久しぶりの休日なのだ。気晴らしに外へ打って出るのもいいだろう。

そう考えた朝永は着替えを済まし、外出用のジャケットに手を伸ばす。すると左側のポケットに固い感触があった。それは最近購入したばかりの、折りたたみ式の携帯電話だった。

朝永にとって、携帯とはあくまで他人との連絡に使う道具に過ぎない。便利なものではあるが、特に思い入れはない。時々こうして置き場所を忘れてしまうのもそのためだった。

一階の部屋に鍵をかけアパートの外に出る。

駅の方角に目をやると、住宅の間道を一直線に横切る高架が見えた。その少し先に立派な駅ビルがそびえ立っている。いつも通勤に使う駅がそこにあった。

道なりに向かうと賑やかな通りが姿を現した。そこは駅の裏手の商店街だった。さつそくコンビニに立ち寄ると、最近のトレンドらしき曲が流れてくる。雑誌コーナーには立ち読みの客が数名。

店の奥にある百円コーナーで目にした商品のパンをいくつか購入する。五パーセントの消費税が余分な小銭を要求するようで少し腹が立った。

コンビニを出たところで朝永はふと足を止め、通りに目を向けた。商店街の通りは駅に向かう人で賑わっている。その中かなりの割合で秋物の制服を身にまとった学生が足早に歩いていた。近くにあるM高校の生徒だろうか。今日は平日だ。彼らは学校に向かっているのだろう。

朝永はその光景をじつと眺めていた。

そのうちに、ある考えが頭をよぎった。

あの日出会った少女も彼らと同じくらいの年頃だっただろう。

もし彼女が学生なら、八月はきつと長期休日の最中だったに違いない。とすると、少女もまた、夏休みの一日を使って、あの駅からどこかに出かけるつもりだったのかもしれない。

逆に考えると、彼女はこの近辺に住んでいるのではないか。

朝早くからプラットホームに立って電車を待っていたのだ。別の電車から乗り継いできたわけでもないだろう。なにしろ乗り換え路線のない駅だ。

S山方面の別の駅から来たところ、目的地を乗り過ごしたことに気づき、あの駅で引き返す途上にあった可能性もあるだろう。しかしこれも特殊なケースであることに変わりはない。やはり、あそこが彼女



にとつての最寄り駅と考えた方が無難だ。

そしてこの近辺に住む学生のほとんどはM高に通う。ならば彼女もまたM高の生徒と考えられるのではないか。

推論に推論を重ねた仮説にすぎない。しかし、可能性はゼロではない。

高校の校門は一箇所。M高の生徒なら必ず一度は通過する地点だ。

つまりその近辺で待ち伏せていれば、彼女に会えるかもしれない。

賭けてみよう、と朝永は考えた。いつしかその足はM高に向かって

## 第4話：10月

5

授業の終わりを示すチャイムが校舎内に響いた。それは昼休みを告げる合図だった。クラスメイト達はそれぞれ好きな場所に散らばり、一日の内で最も賑やかな時間が始まった。

学生鞆を手に教室を離れようとした僕を担任が引き留めた。

「帰る前に森野に伝えてきてくれんか」

日直日誌という名の黒いファイルノートがある。クラス人数の関係で月に一度名前順に日直をすることになるのだが、この日当番の森野は朝から取りに来ていない。どうやら昼休みが始まるや否や、教室を出てどこかへ行つたらしい。そこで時間の惜しい先生は比較的森野と親しげな僕にその役割を押し付けたことになる。

僕は仕方なく引き受けることにした。

広い校舎のどこかにいる森野の居場所を探さなくてはならない。だがおおよその見当はつけていた。

そこは昼休みの騒々しい校舎内において特にひとけのない静かな場所だった。活発さを嫌い、仄暗さを求める森野ならばきっとそこを選ぶだろう。

かつて、ある先生がこう言っていたのを思い出す。

「女の子がいたでしょう。彼女、昼休みになるとほぼ毎日、化学講義室に来るんだ」

扉を開けると明かりのついていない空間の片隅に森野はいた。動きはなかった。

秋の薄明りの日差しが室内を柔らかく照らし、彼女のすぐわきの少し開いた窓の側面を強い風が小刻みに打ち付ける。風はまだ温もりを残していた。

僕は彼女のかたわらに寄った。森野は静かに寝息を立てて机の上に伏していた。その長く黒い髪が彼女の前に垂れ下がって寝顔を覆い隠している。深く眠りこけているためか僕が近づいても気づかない。

見ると、首元にあの赤いひもはなかった。どうやら彼女の不眠症はすっかり回復したらしい。

両方の腕は机の上で組まれ、制服の間から白く細い手首が目に入る。淡い日の光を受けて、リストカットの傷跡がくつきりと浮かび上がる。

僕は少し迷いを抱いた。

なぜなら、この状況は森野を殺すのに都合が良いからだ。

この時間、化学講義室に人は来ない。人の多い場所を避けたがる森野が安全地帯に選ぶほどだ。今僕たちがここにいることすら誰も知らない。

僕はかつて森野の手を欲して動いたことがあった。しかし彼女の首は紐を巻くのもナイフを突き立てるのも丁度良い細さだ。それゆえに、手か首か、僕は少し選択に迷った。

持っていた鞆を下ろし、おもむろに一本のナイフを取り出した。

気まぐれに家から持ってきたそれを、彼女の首元にあてた。尚も寝息を立てて安らぐ彼女に目覚める気配はない。

ナイフは磁石のように森野の頸動脈へと吸い付き、微動だにしない。

あとはほんの少しナイフを動かすだけで事は済む。

極限まで集中し、僕はゆっくりと力を込めた。

そして失敗に終わった。

衝撃音が静寂を打ち破り、僕たちの不意を突いたからだ。

音に気付いた森野が目を開ける。

僕はとっさにナイフを彼女の首元から離れた。いつのまにか机に置いてあった僕の鞆が床に落ち、いくつかのノートとプリントが飛び出しかけていた。窓から流れ込む風の煽りを受けたらしい。僕はそれらを元に戻しナイフを中に収めた。そうして緩慢な動作で身を起こしたばかりの森野と向き合った。

「今日きみが日直の当番だということをお忘れしていたらどう？」

先生からの伝言を伝えた僕に、森野は大きく息をした後、気だるげにこくりとうなずいた。

「聞こえているなら構わない。とにかく、僕はちゃんと伝えたよ。あときみの仕事だ」

「おかしい夢を見たわ」

用事を済まして帰ろうとした僕を引き留めるように彼女の小さな口はそう呟いた。

「どんな夢？」

「私とあなたが殺人事件の被害者を探しに山の奥深くへ行く夢よ……」

森野の言葉に僕は耳を傾けることにした。彼女が自分から話を切り出すのは珍しいことだからだ。

「暗い森を進んでいくと川に行きついたの。そこはちようど被害者の死体が横たわっていた場所で、私はあなたに言われるまま川の中に横たわった……まるで映画のワンシーンのようにね」

「とても興味深いね」

それは、ひよつとしたらあり得たかもしれない世界の話。なぜだか僕はそう思った。僕は続きを催促した。

「私は川の中であおむけになっていて、傍らにあなたが立っていた。私をただじつと眺めていたの。すると私の体が川底に吸い込まれていったわ……とても息が苦しくなって、暗い闇の中に溺れていったの」

うつむき加減でしゃべる森野の表情は長い髪に隠れて見えない。声のトーンは少し緊張しているようだった。

「気が付くと私は小さなお墓の前に立っていたわ。よく見ると墓には名前が刻まれてあつて……」

そこで一旦言葉が止まった。少しためらうかのようだった。

「……そこには『森野夜』と刻まれていたの」

「きみの名前が？」

「そう。変でしょう？ 私はこうして生きているのに、自分の名前のついた墓を見ていたなんて。なんの冗談なのかしら」

僕はしばらく考えて言った。

「多分、その墓に眠るのはきみとよく似た別人だよ」

「どうして?」

「感じたままに言ったただけだ。深い意味はない」

再び鞆を手にした僕に森野は首を傾げた。

「……もう帰るの? 午後の授業もあるのに」

「今日は珍しくおしやべりだね。少々やるべき事があるんだ。先生にはもう伝えてある」

森野にそう言い残して僕は講義室を離れた。彼女は僕が首元にナイフを当てていたことを知らない。

廊下を歩きながら僕は自省した。

もちろん最初から森野を殺すつもりはなかった。あのまま頸動脈を切ると僕は大量の返り血を浴びてしまう。急いでこの場から逃げ切ろうとしても学校は昼休みの最中だ。校舎中に散らばった生徒たちと出くわさずに外へ出る自信はない。そんなことは僕もわかってきっていた。

それでも、あの瞬間だけ、僕は一線を踏み越えても構わないと思っていた。魔が差したとも言えるだろう。理由はわからない。ナイフが僕の意思を支配したのかもしれない。あるいは、彼女をまとう雰囲気

が僕にそうさせるのかもしれない。いずれにせよ、人間は時として理性を超えて動く、ということだろう。

僕はそれ以上の思索をやめることにした。もちろん家に帰るつもりはなかった。

## 第5話：10月

6

その少女の顔を見た時まず目を引くのは左目の下にある小さな泣きぼくろだ。少女の端正な顔立ちと合わさって、見る者に蠟人形のような生気の無さを印象付ける。

そして注意深く観察すると制服の袖から覗く手首の傷痕に気づくだろう。柔らかな肌を綺麗に横切る一筋のそれはリストカットの痕だ。

最後に彼女の全身に目を向ける。いつも黒い服に身を包んでいるためか、その姿は影のようだ。影の中に白い肌がぼうつと浮き上がり、常人とは明らかに違う、異質な雰囲気身をまとっている。

それが森野夜という少女の容姿だった。見る者に死を想起させる、不思議な存在感をまとう人間。

彼女は何も知らないだろう。

自身が既に尾行され、名前や住所まで特定されたことに。

朝永はデジカメの映像を停止し、パソコンから目を離れた。時計を見ると、二つの針が午後三時を過ぎたことを示していた。

「……そろそろ放課後を迎える頃か」

パソコンに取り込んだデジカメの映像はすでに十本以上。これらは全て森野夜という少女を撮影したデジカメの記録だ。彼女の姿を映像に記録し、家に帰ってゆっくりと鑑賞するのがここ最近の楽しみだった。

会って話をしたわけではない。だから、登下校の時刻を狙って隠し撮りした盗撮、ということになる。良識のある人間なら誰しものが犯罪と捉える行為だろう。

もちろん朝永は自らの行いに自覚がないわけではない。警察に捕まるリスクもある。ここまで己を駆り立てる情熱の源が自分にもわからない。あるいは、その理由を知るために自分は行動しているのかもしれない。

M高が放課後になるタイミングを見計らって朝永は家を出た。

目的地は学校前のコンビニ。なぜならそこが校門を出る生徒を一人ひとりチェックするのに容易だったからだ。森野も帰宅時に必ずその地点を通る。その時が尾行の始まりだ。

コンビニで缶コーヒーを購入し、入り口脇でそれを飲みながらゆつくりと待つ。待ち伏せていることを誰かに怪しまれないためのカモフラージュにすぎない。

「……来た」

朝永の瞳が彼女の姿を捉えた。

胸ポケットにあるデジカメの電源を入れて撮影を開始する。レンズの輝きが外から見えないよう少し細工をしている。そうして森野に気づかれぬよう少し後をつけるように歩く。

朝永の目に映る彼女は常に無表情だった。友達と肩を並べて歩いている姿を見たこともない。教室でも誰とも話さず、孤独に過ごしている様子が目に浮かぶ。

ネットでM高に関する掲示板を調べたことがあった。どうやら森野はM高内でも有名な存在らしい。痴漢目当てで近づいてきた教師を撃退したことがある、など真偽の入り混じった情報をいくつか得ている。だが中には気になる情報もあった。

彼女には時折、親しげに話す男子生徒がいるらしい。

その人物の名前までは特定できなかった。だがそれも監視を続けるうちに自ずとわかることだろう。向こうはこちらの存在に気づいていないのだから。

外はすでに日が落ちて、駅前は帰宅に向かう人で賑わいを見せていた。吹き抜ける夜風に秋の深まりを感じた。

森野の帰宅ルートは把握していた。学校を出て駅方面に向かい、駅の裏手を通って自宅に戻る。それが彼女の決まりきったルートだ。

しかしこの日は少し事情が違った。彼女は駅前の一角にある書店に向かった。朝永も森野を追って中へ入る。不意に彼女の姿を見失った。

慌てて棚を移動すると、森野は奥の棚の前にいた。後ろ姿で見えな

いが、本を何冊か手に取っているようだった。  
本が好きなのだろうか。

彼女の背後に近寄って、脇の棚の本に目を向けるふりをして後ろから何気なくのぞき込んでいた。彼女の手にある本はどれも奇抜な本だった。

その背中が目の前にある。

すると、どうしてか駅のホームにいるような感覚に囚われた。

この手で触れて見たいという思いが沸き起こる。

その背中は、朝永のよく知る『少女』の姿と重なった。

ふと朝永が我に返ると、森野がこちらに目を向けていた。

背後の視線に気づいたか。とつさに場所を移動する。

だが、なおも森野はこちらに近づいてくる。

胸ポケットにある撮影中のデジカメに気づかれたらおしまいだ。

心臓の鼓動が早まる。カメラの電源を切らなくてはならない。

手に汗がじんわりとにじむ。朝永はさらに半歩後ろに身を引いた。せめて彼女の視界からデジカメを隠そうと思ったからだ。

その空いたスペースを森野は通り抜けていった。

彼女の向かった先を見て朝永は合点がいった。どうやらワゴンコーナーに行きたかったらしい。その進路をふさぐ朝永がとつさに道を譲ったように見えたのだろう。

彼女は再びその華奢な背中を朝永に向けていた。

そこは割引セールのコーナーだった。在庫処分すらままならない程度の本が並ぶが、そういう本に限って購買意欲は湧かないものだ。森野は掘り出し物を探すかのようにセール本のタイトルを眺める。

「……あった」

森野はその中の一冊を手取る。文庫本サイズのそれは、長い年月をこの書店で過ごしたらしく、白地のカバーが黄ばみがかっていた。かろうじて売り物になるかといった所だろう。ぱらぱらとページを確認した彼女は即座にきびすを返す。目当ての本を見つけたようだ。

再度朝永とすれ違う。怪しむ様子もない。そのまま彼女はレジへと向かっていった。



とつさに朝永はワゴンへ足を運ぶ。すれ違いざまに彼女の持つていった本のタイトルが目に入っていた。幸いにもそれと同じ本がもう一冊ワゴンに残っていた。

朝永はそれを手に取った。

『スナッフフィルム』と書かれている。

その言葉の意味はわからない。ただ、妙にその響きが朝永の心を捉えて離さなかった。

「ありがとうございます」

書店員の声に引き戻される。そちらに目をやると、彼女は会計を終えて帰途につくところだった。

朝永は急いで本の会計を済ませ書店を離れた。

その男が森野の後に書店から出たことを僕は物陰から視認した。彼は一体何者なのだろう。何を目的として森野をつけ狙っているのか。

それはこれから尾行をすればわかるだろう。そのために僕はこの日学校を早退し、男をマークし続けていたのだ。

僕は密かに彼の後を追った。

## 第6話：11月（水）

7

朝永寛一（あさながひろかず）。

二十八歳。近隣にある大学受験の学習塾において講師を勤めており、学習塾のホームページにも顔写真と名前が掲載されている。名前は尾行時に彼の住むアパートの表札から特定していた。

出勤時は常に電車を利用してはいる。そして僕の通う高校の最寄り駅から仕事場の学習塾へと向かい、遅くまで授業をしているらしいかった。

ホームページによれば担当科目は生物。趣味はデジカメでの写真撮影。おそらく偽りはないだろう。

僕はパソコンから目を離して思索を始めた。

何者かの存在に気付き、特定に至るまでの数週間、僕は彼の行動をできる限り追っていた。

尾行するうちに、僕は森野を見つけ狙う彼の目に宿る密かな闇を垣間見た。今のところ、朝永は森野につきまとうばかりで何も手を出してこない。だが今後も危険が及ばないとは限らない。

これまでも何度か森野は命の危機にさらされている。今回も放っておけば僕の知らない所で予想外の事態が起きるかもしれない。

そのためにもまず彼の目的を知りたかった。もつと深い奥底にまで探らねばならない予感があったからだ。

探りを入れる手段は考えてある。

朝永の勤める学習塾のホームページには一週間の時間割も掲載されている。そこから朝永の担当する授業の時間を割り出すことは容易だった。

つまり、その授業の間、彼は確実に外出している事を意味する。

十一月中旬を過ぎた水曜日の放課後、僕は朝永の家に向かうことにした。

駅の裏手を少し歩いた所に朝永の住むアパートがある。二階建ての古いアパートで、僕の肩ほどの高さはあるブロック塀が建物を取り

困んでいる。

この時間、彼は学習塾で授業を行っている。時間割から考えて夜まで戻ってこない。そして朝永に同居人はいない。

「こんには」

アパートの門前で住人とおぼしき女性がこちらに話しかけてくる。僕は会釈を交わした。そのまま女性は買い物袋を携えて出かけていく。アパートに住む友人の家へ遊びに来た高校生とでも思われたのだろう。ほんのわずかでも怪しまれることがあつてはならない。

朝永の住居は一階の角部屋だった。念のため玄関のチャイムを鳴らす。反応はない。朝永の不在を確信する。

鍵は旧式のものだ。ピッキングによって開けられない構造ではないが、他に侵入の手立てがないか確かめる。すると、玄関脇の小さなスペースで人が入れる大きさの窓を発見した。

窓は鍵がかかっていない。扉がすぐ後ろにあり、その向こうの隣家は一面が白い壁になっている。人の視線が入らない安心感からか、換気用の窓として鍵をかけずに使っているのだろう。

耳を澄ませ、辺りに人の気配がない事を確かめる。レールの上を走る電車の音が遠くから聴こえる。

指紋が付かないように、あらかじめ持ってきた手袋を装着する。

そうして僕は静かに窓を開け、部屋に足を踏み入れた。

持ってきた鞆の中に靴を仕舞う。部屋は片付けられておらず雑然としていた。仕事用とおぼしきスーツが床に放置された様子から、細かな事あまり関心を払わない家主の性格を想起させる。

大きな物音を立てないよう慎重に動く。朝永がいま仕事場にいることはアパートの他の住人も知っているかもしれない。ならば本来誰もいない部屋から物音があれば不審に思うだろう。そんなことがあつてはならない。

人の家に侵入するのはこれで二度目だ。しかしその時と事情の異なる今回は、侵入を悟られないよう動く必要があつた。つまり、ここに来た目的もあの時とは異なるということだ。

僕は、朝永が森野をつけ狙う理由を知りたかつた。

だが彼を尾行し続けたところで表面上の行動を追うだけでは手がかりを掴めない。彼女をどうするつもりなのか、何の狙いがあるか。本人に聞いたところで無駄だろう。警戒されて終わるだけだ。だから本人の気付かない所で何らかの手がかりを掴むほかなかった。

とはいえ情報を調べ出すための心当たりはある。

森野を盗撮した映像に、朝永の意図がなにか隠れ潜んでいるかもしれない。

注意深く観察し続けた結果、彼が常に胸ポケットに隠したデジカメから撮影していることに気付いた。ならば撮った映像はどこかに保存されているはずである。僕の推測では、朝永のパソコンにその映像データが見つかるかもしれないと考えた。

果たしてデスクトップ型のパソコンが机の上にあつた。電源を入れる。幸いパスワードはかかつておらず、自由にファイルを閲覧することができた。

大抵のファイルは塾講師としての仕事で使う資料のようだった。膨大な量のファイルを一つ一つクリックして確かめる。しかし探したい情報は見つからない。無関係なファイルに時間を取られ、僕はかすかな焦りを覚える。

だがそれも長くは続かなかった。隠しファイルの存在を見つけたからだ。

僕の予感は当たった。クリックすると、そこには森野夜を隠し撮りしたデジカメの写真と映像が並んでいた。

もし僕がこの盗撮物を警察に送ったら、おそらく彼は捕まるに違いない。もつとも、そんな真似をする気はなかった。どうやってこのファイルを取得したのかと僕の方が警察に問い詰められるだろう。

僕はそれらをひとつずつチェックしていった。

だが期待に反してそれは何の変哲もない盗撮物でしかなかった。次第に疑念が浮かんだ。

この男は本当にただの盗撮魔でしかないのだろうか。

もしそうなら、あてが外れたことになる。森野にとって迷惑であっても、命を奪う事態にはつながらないだろう。

こうして大きなリスクを冒し部屋に侵入する必要もなく、何かがあると思っただのは単なる僕の見込み違いだったことになる。

僕はわずかに落胆した。だがその時僕は新たなファイルを見つけた。ファイルは画面をスクロールした最下層にあった。

『Grave』

墓標、と名付けられたファイルの中身は大量のテキストだった。

僕は直感で彼個人の日記に近いものだど悟った。

僕は鞆から一枚のディスクを取り出した。

データを保存するためだった。パソコンに何らかの情報が隠されていることを想定して事前に用意したものだ。ここは長居していい場所ではない。限られた時間を使って、このデータを持ち帰る必要がある。僕はそう判断した。

パソコンに保存用のディスクを差し込む。データをコピーする間、僕は念のため部屋をくまなく見て回ろうと考えた。

居間、台所、玄関と見て回る。

足の裏におかしな感触があった。危うくバランスを崩しそうになる。

見ると、折りたたみ式の小型の携帯電話が先ほどの無造作に投げ捨てられたジャケットのそばに転がっていた。

忘れ物だろうか、と僕はにわかと思った。仕事で使うものかもしれない。もしそうなら忘れ物に気づいた朝永は急いで部屋に引き返すのではないか。

つまり、早めに帰宅する朝永と鉢合わせになる可能性も否定できない……。

……玄関の向こうから物音が聴こえた。

## 第7話：11月（水）

全身が硬直した。

パソコンは起動したままだ。

もしもの時は一刻も早く窓から脱出しなくてはならない。

僕は耳を澄ませ、音の続きを待った。

……音は遠ざかっていく。バイクのエンジンをふかす音だろうか。

ふと、僕は薄暗い玄関のポストの下にある新聞の存在に気づいた。

どうやら新聞配達員が夕刊を入れた音だったらしい。

僕は手首に二本の指を当てた。脈は速くなっていた。それはつまり、平静を失っていることを意味した。

深く息を吸いこみ、心を落ち着けようと集中する。焦りは致命的なミスを犯すことにつながる。

冷静に考えると朝永はいま授業中のはずだ。

もし彼が忘れ物に気づいたとしても、仕事の時間が迫っていればそちらを優先しようと考えてるだろう。

すなわち、帰ってから携帯を探そうと彼が考えてもおかしくない。

床に転がった携帯電話を見つめながら、少し頭を巡らせた。僕はこの携帯が何かに使えるかもしれないという予感を抱いていた。

8

家に戻ると、リビングで妹の桜がユカと遊んでいた。

「どこ行ってたの？」

僕はいつものようにコンビニ、と答える。その対応は半ばあいさつのようになっていた。リビングのソファアームに教科書とノートが放置されている。そのことを指摘すると桜は苦し紛れにこう言った。

「忘れてたわけじゃなくてユカが遊ぼうって訴えてくるから仕方なかったの！」

ユカは妹に目もくれず庭先に顔を向けていた。

「ねえ、棚に置いてたチケットしらない？ あの展示会のチケット、チケットショップに売りにいこうと思ってたのにどこ行ったのかわか

らなくて」

「売つてもたいしたお金にならないよ」

二階の部屋に戻った僕はパソコンを起動した。

窓から夕日が差し込んでパソコンの画面を遮っていた。僕はカーテンを閉め、鞆の中から、朝永の部屋から持ち出した携帯電話と、ファイルデータの入ったディスクを取り出した。

そのディスクをパソコンに挿入し、ファイルを開く。

朝永はきつと、パソコンに書き残したメモをこうして誰かに読まれるなど夢にも思わないだろう。僕はテキストを読み始めた。

日記は森野と朝永の出会いから始まっていた。

八月。朝永が森野に遭遇した日、森野は駅のホームに佇んでいた。その日、森野は僕とあの駅のホームで待ち合わせをしていた。そして共にS山へ向かい、水口ナナミの死体を発見した。

次に森野を特定した時期は九月。記述から考えておそらく、ユカを僕の家に取り取った少し後だろう。

そして十月、森野が買った本のこと……僕に覚えがあった。机の引き出しから森野にもらったそれを取り出す。『スナッフフィルム』というタイトルの本。僕は得心した。うつすらと感じ取っていた彼の狙いが、明確な形としてあらわれ始める。

僕は、文章を通じて彼の追体験をしている錯覚を抱いた。

僕と森野が数々の事件に遭遇してきた裏で、この男は密かに動いてきた。

日記には続きがあった。

11月12日

森野夜を見ているうちに、いつしか私は幼い頃のことを思い出した。

それは八月の暑い日のことだった。

夏休みを迎えた私は姉と二人で祖父母の家へ泊りに出かけていた。当時私は九歳の子供で姉とは少し年が離れていた。

やがて祖父母の家から帰る日がやってきた。両親の暮らす家へ帰るためには電車を利用する必要がある、私と姉は木々に囲まれた駅で電車を待っていた。

閑散とした駅にはほかに誰もいなかった。確か、私と姉は駅のベンチに腰掛けて他愛のないおしゃべりをしていたと思う。

どのくらいの時間が経ったか。長い退屈の後、ようやく電車の訪れを告げるアナウンスが流れた。木々の合間から現れた電車はスピードを保ったまま駅に向かってきている。

やっと来た姉は言って席を立った。

私はその時、姉の背中を捉えていた……。

あの衝動にかられたのは、その時が始めてだった。

駅のホームで姉は死んだ。電車が勢いよくやって来た時に、その背中を私が突き飛ばしたためだ。

肉親をこの手にかけるという重い罪を犯したことはわかっている。しかしどうしてそうしたのかはわからない。

ただ、後悔はなかった。

11月13日

奇跡的に私が疑われることはなかった。姉の死は転落事故として片付けられた。

あの時、駅のホームには私たちのほかに誰もおらず、電車の運転士もどうやらその瞬間だけ、線路に割り込むほどの木の枝に目を取られていたのだという。駅に監視カメラの備わっていない時代だったことも幸いした。私はまだ子供で、姉との仲も良かった。周囲が私を疑うにはあまりに根拠に欠けていたのだろう。

そうして、いくつもの偶然が重なった結果、私が断罪されることはついになかった。

後悔は、なかった。あれだけ仲の良かった姉を死に至らしめたにもかかわらず、私は後悔など抱いていない。おそらく、生まれた時から人としての何かが欠落していたのかもしれない。

いや、後悔はあった。



私は、姉の死の瞬間をこの目で見た。  
だが、死の瞬間の姉の『表情』を見ていない。  
あの時うつ伏せに倒れた姉は私に振り返ろうとして、無機質な鉄の轍に遮られ、視界から消えていったのだ。それだけが唯一の心残りだ。

人はあの状況でどういう表情を見せるのだろうか？

私はいつの日かそれを見てみたいと思うのだ。

11月14日(前)

森野夜。

巷で連続殺人事件が起きていた八月の朝、あの駅のホームで私に背を向け立ち尽くしていた少女。

彼女の容姿はどこか姉に似ている。偶然にも死んだ姉がちょうど彼女と同じ年齢だった。

だが姉と違って、森野夜には私を惹きつけてやまない特別な何かがあった。私の中に眠る感情を呼び覚ましたのも彼女が醸し出す特別な何かに惹きつけられたからだろうと思う。

彼女こそ、姉の『再現相手』に相応しい。

彼女を突き落とし、轢かれる瞬間の絶望を記録するのが願いだ。

いつの日か、彼女が駅のホームに上がる時に備えて下調べは済んでいる。以下、ここにそれを記しておく……。

パソコンから目を離し、カーテンをわずかに開けて窓の外の景色を眺める。すっかり日が暮れていた。

僕の脳裏に、かつて対峙してきた数多くの異常者たちが浮かんでは消える。

心の奥底に、人間と相容れない暗黒の一面が潜んでいる人々。日頃は善良な一般市民を装って社会に同調し、ふとした瞬間に衝動に囚われ、その猟奇的な欲望をむき出しにする者たち。

朝永もそんな彼らと同じ側の存在なのだろう。おそらく彼自身そのことをよく知っているに違いない。僕もまた、朝永と同じ側の存在

だからわかる。

人間には殺す人間と殺される人間が存在する。

僕や朝永は前者で、森野は後者だ。

確かな事がいくつかある。

まず一つ。朝永は森野を殺害しようともくろんでいる。それも、駅のホームから突き落とすことに異様なまでの執着があるらしい。逆に言えばそれ以外の手段では彼女に手出ししないとみている。

だが彼女は電車で通学しないため、線路に突き落とすチャンスはこれまで存在しなかった。したがって今のところ獲物を観察するに留まっている。朝永なりの妥協の産物なのだろう。

そしてもう一つ。彼はまだ僕の存在にまでたどり着いていない。

僕は朝永の家から二つの物を持ち帰った。ファイルデータと携帯電話だ。この二つは、朝永への大きなアドバンテージになりうる。

特にデータの入ったディスクは彼の盗撮と殺人を示す決定的な証拠だ。もつとも警察に届けるつもりはない。僕はそういう人間だった。

おもむろにパソコンのわきに置いた携帯電話の画面を開く。

着信が何件か入っていた。紛失に気付いた朝永が家からかけたものだろう。

僕がこれを持ち去ったことで、第三者の存在を朝永に気付かれるかもしれない。だが、家主の性格を推測するに数日は静観するとみている。僕が致命的なミスを犯していない限りはだが。

無論、返そうと思えば朝永のアパートに赴き、玄関先にでも置けばいい。もつとも僕がそうしないのには理由があった。

ある計画が僕の脳裏にあった。

もし森野を殺せるチャンスが訪れたら、朝永はどうするか。

彼女がどこかへ出かけるために駅を利用する機会があったら。

おそらく、朝永は森野を殺害するべく行動に移すかもしれない。

その様子を僕は見てみたい。

なぜなら森野の死という最高級のスナッフフィルムを撮ってきてくれるかもしれないからだ。

## 第8話：11月（木）

9

朝永が携帯電話の紛失に気づいたのは仕事から帰宅した際のことだった。

何処で落としたか見当もつかなかった。家の中を探しても携帯は姿をみせず、試しに備え付けの家の電話からかけるが一向に繋がらない。普段から管理を怠っていたことをこの時ばかりは後悔した。

だがデジカメの紛失でなかったのは不幸中の幸いだろう。森野の撮影に困る事態は避けられたからだ。それに引き換え携帯はただの便利な機器にすぎない。もともと、外出時の連絡に少々困る程度の影響は出るだろう。

朝永ははじめ警察に届け出ようか思案した。だが過去の行為が脳裏をよぎり、警察への接触をためらわせた。

家の電話が鳴ったのはその夜だった。電話機に表示された番号は、紛失した携帯のものだ。朝永は慌てて受話器を取った。

「はい……」

『朝永さん、ですね』

知らない人間の声だった。朝永は怪訝な表情を浮かべる。

「失礼ですがどなたですか？」

『ああ、すみません。ぶしつけに電話をかけてしまいましたね。夜遅くに失礼します。僕はこの携帯電話を拾った者です』

若い男と思わしき電話の声の主は続けて言った。

『といっても、駅に落ちていたのを見つけたのは僕の友人です。そしてその友人から携帯を預かった僕は持ち主を探そうと思い、登録された番号から推測して電話をかけました』

「なるほど……わざわざありがとうございます」

朝永は安堵した。何処で落としたかも定かではなかった携帯を見つけてくれた人たちに。

しかし同時に朝永はかすかな違和感を抱いた。この電話相手のとった行動には、何かおかしなところがある。

「なぜ、警察へ届けずに連絡を？」

『……確かにいったんは警察に持ち込むことも考えました。しかし警察という人種は無駄に疑り深い。怪しげな高校生が携帯を持ち込んだぞ、と僕のことを疑う光景が目には浮かぶのです。おわかりでしょうか』

高校生、という言葉その耳が拾う。電話の主は少年と呼べる年齢なのだろう。しかし彼は警察を毛嫌いしているらしく、朝永は妙な共感を抱いた。

『僕は携帯を使つてあなたに直接連絡を入れた方が良いと思いましたが。失礼ながら記載されていたあなたの個人情報のをぞき見してしまいました。それについては謝りたいと思います。非常識だったかもしれないですね』

「いえ、お気になさらず。むしろ私の方がお礼を言いたいほどです」

こちらとしても警察と関わり合いにならない方が良い。朝永は自らの後ろ暗さを自覚していた。

『ところで朝永さん、携帯はあなたにお返しするつもりなのですが、日時をこちらで指定したい。あなたの家まで伺うのはこちらとしても気が引けるので』

「私の家まで来てもらっても構いませんよ。住所も携帯に登録されたもので間違いありませんから」

『僕もそうしたいのですが……生憎僕にはしなくてはならないことがあるのです。そこで友人にまた預け直し、僕の代わりにあなたにお返ししようと考えました』

「友人？　という携帯を拾った人ですか？」

『ええ、モリノヨルという名前の女の子です……』

心臓の鼓動が跳ね上がる。

受話器を持つ手がにわかに震えた。

手の震えはやがて全身に伝わり、朝永から思考の流れを奪い去った。

『どうしました……？』

少年の言葉に朝永ははっとした。

「い、いえ。何でもありません」

言葉を絞るように言う。

『朝永さん、声の様子が先ほどよりも良くないようですね。体調がすぐれないのであれば、やはり警察に届けてお返ししましょうか……』  
「だ、大丈夫です。問題はありません。あなたの指定した場所に向かいます。ですからあなたとの友達にもそうお伝えください」

この機を逃すわけにはいかない。あの少女に直接会える機会などまたとないのだから。

『……わかりました』

電話の向こうで少年が笑みを浮かべているのを感じた。

少年が告げた場所はあの駅のホームだった。

日時は明後日の土曜日、朝八時半。そこに泣きぼくろが特徴の黒髪の少女が待つており、少年はその時間に確認のため、改めて少女へ電話をかけるという。

朝永は急いで壁掛けのカレンダーを確認した。幸い、その日は塾の仕事がなかった。

『森野には僕から伝えておこうと思います。もしあなたの都合がつかない時は明日中に連絡をお願いします。それでは……』

興奮が冷め止まないまま日付は変わった。

少年との電話を終えた朝永は夢見心地だった。森野と会う奇跡的なチャンスに、布団に入ってもなお眠りにつけない。願ってもなかった『撮影』ができる。初めて出会ったあの夏の日のように、久しくなかった感情を噛みしめていた。

しかし、時がたつにつれ朝永の脳裏に別の感情が湧き上がる。

一抹の不安があった。

もし撮影に失敗した時、警察に捕まる可能性は高い。自分には社会的な立場がある。ささやかながら塾講師として教壇に立ち生徒を指導する立場にある。そのような人間が事を起こすなど誰が考えるだろう。

仮に警察に捕まれば周囲の見る目は一変するだろう。失うものは

あまりに大きい。

今ならまだ事は起きていない。やめるのは簡単だ。その場合は少年に連絡して素直に警察へ届けるよう指示すればいい。向こうが返さなければ仕方ないが、こちらで警察に被害届を出すまでだ。

しかし、不安のもととは他にもあった。

布団から起き上がり、パソコンに向かい合う。

机の蛍光灯のスイッチを入れる。電源の落ちたモニターが朝永の輪郭をおぼろげに映し出す。

少年の行動にはどこか違和感が残る。

都合の良い舞台が用意され、あたかも自分がそこへ誘導されているように感じるのだ。電話の少年は自分に名乗らなかつたことも気になつた。

果たして素直に信じていいのだろうか？

もしや携帯は自分が落としたのではなく、少年が盗んだのではないか。

仮にあの電話の声の主になにか企みがあるとするなら、先んじて推測する必要がある。

その一、単に少年がからかっている場合。

少年は現場に来て朝永を監視するだろう。なにか悪戯を仕掛けてくるかもしれない。だがこれはまだかわい方だ。

問題はその二、自分が森野をつけ狙っている事を電話相手が知っている場合。

これは極めて問題だ。少年が何か重大な証拠を握っていた場合、まづ駅に森野を来させないはず。わざと森野の名を口にして自分をおびき寄せ、そこで盗撮の証拠を突き付けるだろう。

盗撮は誰にも気づかれないよう用心していたはずだが、どこかでミスを犯したのかもしれない。

ならばすでに相手が警察と連携している可能性は……さすがにないだろう。

世間体を気にする警察が、果たして一般の高校生を危険に晒すだろうか？

警察の関与はまず考えなくていい。おそらく少年は警察に通報すらしていない。

しかし、だからといって、相手が盗撮の証拠を握っていないとはい切れない……。

あの電話相手を調べる必要があると朝永は感じた。

少年は森野とつながりを持っている。おそらく知人かそれ以上の関係にあるだろう。学校の掲示板でそれとなく噂されていた友人かもしれない。

念のために仕事先の学習塾にM高生が在籍していないかチェックしておこう。同じ学校の生徒への聞き取りも塾講師という立場なら不可能ではない。首尾よくいけば、そこから彼の素性を割り出す糸口が見つかるはずだ。

淡い光がモニターをともした。

朝永がファイルを開くためパソコンの電源を入れたためだった。『Grave』と名付けたそのファイルにある日記の中身は、いつの日か森野夜のスナップフィルムを収めることを想定してつづられた実行計画にほかならない。

少年の存在に言い知れない一抹の不安はある。撮影をしくじり、警察に捕まる可能性も高い。

しかし、運命というものは時に全てを超越し、成功をもたらすものだ。かつて姉を殺害した自分は罪を逃れることができたのだから。

もし運命が朝永に森野の死を許すなら、針の穴を通すような奇跡が成り、警察の手を逃れ、悠々と映像を持ち帰ることができるだろう。今度こそ、しっかりとこのレンズに収めたい。

死の運命に魅入られたあどけない少女の、最期の表情を見てみたい。

朝永は机に飾られた姉の写真に目を向けた。今も色褪せぬその表情が森野と重なって見えた。

## 第9話：11月（金）

10

登校の支度を終えて階下に降りると、ちょうど犬の散歩を終えた桜と出くわした。

「行ってらっしゃい。今日は家を出るの早いね？　いつもは電車に乗り遅れそうなくらいギリギリなのに」

「学校へ行く前に用事があるんだ」

それが駅の下調べであることを伏せて答えた。

「外、寒いよ兄さん」

吐息で手を温めながら靴を脱ぐ。そばにいる犬のユカは長い体毛に覆われたゴールデンレトリバーらしく平気な顔をしている。

「明日の土曜は雨が降るんだってね」

リビングから見送りに来た母が言った。

「小雨だけじゃないっそう冷え込むそうよ……というわけで明日もお散歩お願いねっ！」

喉を絞められた鳥のような声を出す妹をよそに僕はユカを撫でた。行ってらっしゃい、気を付けて、とユカの目は語りかけるかのようだった。

ふと、僕は考えた。子犬ですら驚いて飛びのく森野が大型犬のユカを見たらどうなるだろう。

シヨックのあまり倒れ込むかもしれない。

もし偶然倒れ込んだ場所が電車が来る寸前の線路上ならば、彼女は命の危機にさらされるだろう。そんなことを頭に巡らせながら僕は家を出た。

最寄りの駅に向かう道を歩きながら、明日のことに思いをはせる。僕は森野のスナッフフィルムが欲しかった。

しかし手を下すのは僕ではない。朝永を利用して森野を殺害させ、撮り収めた映像を後日彼のアパートから盗み出し、部屋でじっくりと鑑賞する。それが僕の計画だった。朝永の日記を読むうちに思っていたものだ。



もちろんこの計画にはいくつものハードルが存在する。まず、僕と違い、普段電車を使わない森野をホームに立たせる必要がある。さらに朝永の『撮影』を成功に導かなくてはならない。不確定要素は多い。しかしこのうちの一つについては既に解決している。これは全くの偶然なのだが、四日前の月曜日に僕は森野と展示会に行く約束を交わしていた。

この約束に森野が乗り気なのは幸いだった。僕はこの状況を利用して森野とあの駅のホームで待ち合わせることにした。

一方で朝永を誘導するために彼とコンタクトを取らざるをえなかった。しかし極力僕が直接会うリスクを避けたい。そこで彼の家から持ち出した携帯を使うことにした。これにより、朝永を森野と引き合わせる形を作りだした。

しかし、最後の問題がまだ残っている。撮影が成功するか否かだ。朝永もこのことを考えているであろう。

成功するには二つの条件が存在する。

- ・ 電車が時間通りに来ること
- ・ 森野が転落死しやすいポジションに立つこと

まず一つ目の条件について、駅に発着する電車について確認する。

あの駅は一つのホームを双方向の電車が分けあう。すなわち展示会場駅方面の一番線と、S山行ききの二番線だ。八月に僕と森野が死体を探しに山へ行くため待ち合わせた時は二番線の電車だった。

しかし今回、森野は一番線を利用し、そこで八時半に僕が連絡を入れる手はずとなっている。何事もなければ、その時刻に電車がやって来るだろう。

では、二つ目の条件はどうクリアされるか。

駅のホームは直線形のため、カーブにより減速することはない。よって、展示会場行ききの電車が最大スピードで突入するポイントに森野が立てばいい。その場所は進行方向と反対側、つまりホームのS山方面側の先端だ。

森野はきつと、混雑を嫌い、人のいないエリアに向かうだろう。

改札口への階段の奥、駅の自販機とベンチのさらに向こうにある場

所。人の視線が遮られ、監視カメラの位置も届かない。朝永もこの地点を見定めているのは、彼の日記から明白だった。

あとは彼が行動を起こすか否かだ。

こちらの思惑通りに誘い出されるだろうか。彼が当日駅に現れたなら、その覚悟は揺るぎないものとみていい。つまり、森野の死は避けられない運命となる。

しかし反面、都合よく行きすぎではないかと朝永は疑うかもしれない。

朝永がどう出てくるか、よく考えた。リスクは高い。僕に何か重大な見落としがあるかもしれない。計画に狂いが生じれば、森野はただで殺され、僕も無事ではすまないだろう。かなり際どいところまで相手と接触している自覚はある。

朝永との電話で約束を取り付けた。しかし会話にわずかでも疑われる要素があれば、僕への疑念につながる。名乗りもせず、素直に警察に届けない僕を不審に思ったかもしれない。もし朝永が駅に来なければ、おしまいだった。

『まもなく、二番線の電車が発車致します。閉まる扉にご注意ください』

目的の駅に降り立つと、ホームの上は朝の通勤客であふれ返っていた。人の群れがめまぐるしく動き、流れを作っているように見えた。

僕は駅のベンチに腰掛けてその光景をじっくりと観察した。

ホームの両サイドからひっきりなしに電車が往来し、開いたドアから人があふれ出る。その奔流が改札をめがけて階段に吸い込まれていく。やがて発車の警笛が鳴り、ホームは再び静寂に包まれる。

ベンチから離れてホームの縁に立つ。ホームは看板広告に遮られているため駅の外からの視線は入らない。

線路下をのぞく。縁に立ってようやく線路が顔を出す。思ったよりも深い。森野の腰ほどはあるだろうか。一度転落したら華奢な彼女の腕で全身を持ち上げることは難しいと感じた。

『まもなく、一番線の電車が参ります。白線の内側で、お待ちください』

機械的な入線アナウンスが再度流れた。

僕はまぶたを閉じた。この場に森野が立つ光景を想像した。展示会場行きの一歩線の電車を待つ姿を。

八時半になり、電車が轍の音を響かせ、駅に入る。

森野は視線をそちらに注ぐ。

この瞬間、彼女の背中は無防備だ。

僕は力を込めてその背中を押す。

バランスを崩した森野はあつという間に突き落とされ、暗く冷たい線路に倒れ込む。運転手が急ブレーキをかけるが間に合わない。急いで起き上がった森野は這い上がることもがく。しかし非力な彼女に自分の体を持ち上げることは不可能だ。

最期の瞬間、森野の絶望的な表情を僕は無慈悲に見つめていた。

目の前を電車が通過する。吹き抜ける風が心地よい。

僕は轍にすり潰された森野の肉片を空想した。

舞台は整った。

明日土曜の朝、森野夜は。

## 第10話：11月（土）

11

見える世界が違った。

いつも仕事で使うターミナル駅が、毎日苦しくて仕方のなかった通勤路が、今日はとても輝いて見える。雨は降りはじめていた。しかし、気分は晴れやかだった。

朝永は駅ターミナルの入り口の片隅で、人目につかぬようたたずんでいた。服装は正体を特定されないよう分厚い眼鏡をかけ、地味な色のフードコートを羽織る。季節柄風邪を引かないようマスクで顔を隠しても怪しまれない。スニーカーもこのために用意した中古品。撮影後はまとめて処分しなくてはならない。

デジカメはコートの胸ポケットにあり、レンズ用の穴を開けた特殊な細工をして外見からは見えないように施してあった。

予報ではこの土日ずっと雨傘が手放せないらしかった。昨日までなかった冷え込みに、道行く人は皆着込んでいる。こころなしか、駅前には人が少ないように見えた。この天候に気が滅入り、週末の外出を控えているのだろう。朝永は好都合かもしれないと感じた。

まだホームには上がらない。ホーム上の監視カメラに長く映るリスクを避け、最初は駅の改札前で待つ。ここなら人の流れを一手に把握できるからだ。

約束の日。果たして森野は来るだろうか。

八時半を過ぎるまで待ち、もし彼女が来ないなら引き上げるつもりでいた。おそらくこの日が最大のチャンスとなる予感があった。しかし一旦諦めても、それで彼女との接点がうしなわれるわけではない。後日また『撮影』のチャンスをうかがうだけだ。

朝永は時計を見た。針は八時を過ぎたことを示す。再び顔を上げた。そのとき雑踏の向こうからやってくる人物に目を見開いた。

森野夜だ。

その顔を見た瞬間、朝永に激しい衝動がわき立つ。あの電話は本当だった。

森野の服装は黒で統一された服装だった。黒のロングコートを羽織り、これもまた影のようなポーチを肩にかけている。黒衣の合間からのぞく素肌は病的に白い。季節の違いはあれど、まさにあの日出会った少女のままだった。

尾行を始める。ひそかにカメラのスイッチを押し、その姿をしつかりと収めつつ、後をつける。

森野の背中は無防備で、触れれば崩れてしまいそうだった。

用心してあたりに目を光らせ警戒を怠らない。電話相手の少年がどこかで監視している可能性もないとはいいきれない。

しかし少年の居場所を確認する手段はある。八時半、森野に連絡を取ることになっていたはずだった。その時辺りを見回し、電話をかける少年らしき人物がいなか探し出す。もし駅のホームにそれらしき人物がいなければ、彼が自分を見張っていないことを意味する。

あとは運を天にゆだねるだけだ。

森野のあとを追って二階のプラットホームに上がる。ホーム上の人まばらだった。雨がホームの屋根を叩き、皆、空の具合を眺めているか、携帯に目を落としている。視線を他人に向けるものは少ない。好都合だった。

森野の姿を探す。ホーム中央部にはいない。後ろを振り向く。

……朝永は天に感謝した。

あの夏の日と同じように、彼女はホームの端に立った。そこはまさに、突き落とすのに絶好のポジションにほかならなかった。

置き物ひとつないベンチに腰掛ける。自分が約束の相手だと彼女に気づかれてはならない。素知らぬふりをして、その時を待つ。電車で遅れはないが、いつスピーカーから遅延連絡が来るかもわからない。祈るばかりだった。

腕時計を確認する。もうすぐ指定の時刻を迎える。本来なら森野に声をかけて携帯を返してもらうはずとなっていた。しかし、携帯などいらない。欲しいのは表情だ。

小さな着信音が朝永の耳に届いた。音は森野からだ。彼女は携帯を耳に当てた。

すばやく周囲を見渡す。電話をかけているであろう少年らしき人間の姿は……ない。

彼の言葉通り、この場所にいないことは確定した。約束は本当だった。ほっと胸をなでおろす。

朝永はゆつくりと立ち上がった。

鉄輪の音がかすかに聞こえる。心の鼓動が耳にまで伝わる。感情の昂ぶりを必死に抑え、背後に近づく。森野は電話に気を取られ、無防備だ……。

『……まもなく一番線に、電車が止まります。白線の内側に下がってお待ちください』

駅のスピーカーからアナウンスが流れはじめた。

八時半。

時刻に狂いなし。

もうすぐ電車が速度を保ちながら駅に来る。

皆、同じように携帯に目を落としている。

運命は朝永に味方した。朝永はそつと森野の背後に周る。彼女は電話で気づかない。

これ以上ないほど理想的な状況に、朝永はほくそ笑む。

まもなくこの少女は肉塊に変わるだろう。その最後の瞬間を胸ポケットに隠したカメラのレンズに納める。撮影を終えた後は混乱に乗じて素早く立ち去り、監視カメラに映りこむことなく駅を後にする。

森野の背後にぴつたりとつく。

その細身を押し出すために、ゆつくりと手のひらを向けた。

タイミングは外さない。

監視カメラからも遠く、客の目線は一樣に手元の携帯画面に向けられている。

誰も見ていない。

朝永は全身に力を込め、勢いよく押し出した。

その時。

森野は勢いよく身をひるがえし、半歩横に飛びのいた。朝永の手は虚空を切り、そのままバランスを崩す。身体の勢いは止まらず、ホームの外へ吸い込まれていく。雨に濡れた線路が眼前に見えた。

その視界の端に、無情にも鉄の塊が迫っていた……。

……雨が頬にあたり、朝永は我に返った。  
生きて、いるのだろうか？

指先を動かす。手は無事だ。

足の感覚も、ちゃんとある。体に問題はないらしい。  
ただ、視界に映る世界が、いつもと違ってみえた。

どうやら自分は、ホームの縁に倒れ込んだらしかった。  
その数センチ先に、雨に濡れた鉄塊があった。

『……』乗車いただきありがとうございます。一歩線の電車は八時三十分発となっております……』

視線を感じる。

見上げると、森野の姿があった。

彼女はその場に立ち尽くし、わずかに目を見開いていた。どうして  
だか、それが彼女が示す最大限の驚愕であることが読み取れた。

「大丈夫ですか」

電車の車掌の男が声をかけた。朝永は答えず、おもむろに立ち上がる。  
視線を森野の方に向けたまま。どんな表情を森野に向けているのか、彼自身にもわからない。

彼女はおびえた猫のような動作で、ゆっくりと、電車に乗り込んだ。  
警笛が鳴る。車掌の男は首を振って運転室に戻っていく。問題ないと判断したのだろう。

やがて扉が閉まり、電車は静かに動き始めた。森野を乗せたそれは  
朝永を置き去りにしていく。

そして誰もいなくなった。

駅が再び静けさを取り戻してしばらく後、朝永はおもむろに動き出した。  
手袋を脱ぎ、デジカメの電源を切って、すぐそばのベンチに腰

掛けた。

どつと疲労が出た。

ぐしゃりと頭を抱えた。

悔しさから涙がほほを伝って落ちていく。

今はもう、絶望しか残されていない。

成功を手にしていて、はずだった。

幸運が、奇跡が、自分に舞い降りていたはずだった。だがそれでも失敗した。なぜ森野が予想外の動きを見せ、半歩横に身を引いたのか、わからない。

撮影を意識しながらだったことが幸いした。朝永はほんの少しだけ勢いをセーブしていたのだ。もし全力で手を突きだしていたなら、勢いそのままに、自身が転落死していただろう。

何故彼女が電話の最中に突如こちらを振り向いたのかはわからない。い。

ただ一つ言えるのは、おそらく千載一遇のチャンスを逃したという事だ。この幸運は二度とやってこない。

……雨音を縫うように、携帯の着信音が聞こえた。



## 第11話：11月（土）

携帯の着信音を耳にしたのはその時だった。

慣れ親しんだメロディがどこからか聞こえる……朝永は我に返り、辺りを見回した。するとベンチの端の席に何かがあった。すぐに自分の携帯電話だと気づいた。

先ほどベンチに座った時には何もなかったのを確認したはずだ。すると森野が置いたとは考えにくい。ならば一体誰が。妙な胸騒ぎがあった。

朝永は意を決して画面を開いた。発信元は非通知、しかしその相手に心当たりはあった。

着信ボタンを押して耳に手を当て、電話の声を待った。

『もしもし』

「……やはり、お前の仕業だったか」

『ああ、ちゃんと手元に届いたようですね。確認ができてよかったです』  
紛れもなくあの少年の声だった。背筋が汗ばむ。しかし、先ほどまでの失望が静かな怒りに変わりゆくのを感じた。

「どこか近くにいるのだろうか？ 隠れてないで出てこい」

『いえ、僕はあなたと顔を合わせない方がいいのです』

「私をからかっているのか？」

『もう一度言います。僕はあなたと顔を合わせるべきではないのです。なぜだか、わかりますか？』

この場に相手がいたらぶちのめしたかった。

だが朝永は思い出した。彼は犯行の瞬間を目撃しているにちがいない。自分のことが森野を突き飛ばそうとした異常者に見えただろう。

内心舌打ちをする。まずはどうにかこれを弁明しなくてはならない。

この場を切り抜けるため朝永の脳はかつてないほど回転速度を上げていた。

『……いつも不思議に思うのです。なぜ森野はこうもおかしな人に目

を付けられるのかと』

切り出したのは少年の方だった。

「何の話だ？」

『実を言おうと、森野には変質者に好かれる少し変わった体質があるのです。そして何度も危ない目にあっている。殺人事件の犯人に狙われたこともありました。そして僕は以前から、彼女の身に起こりうる死に方を想像してきました。たとえば、誰かにつきまとわれ、駅のホームで突き落とされる可能性も視野に入れていた。そこに予想通りの挙動をみせる変装した人間が現れたら、誰だつてマークする』

朝永の心の奥に何か引つかかる。

携帯を持つ朝永の手にじんわりと汗がにじむ。この少年から不気味なものを感じた。

だが、今少年との電話を切れば、彼はすぐにでも通報するだろう。すでに身元はばれているのだ。話を聞いた警察の手が自身に及ぶ未来が頭に浮かぶ。そうなればおしまいだ。

「なにか私の事を誤解をしているようだな」

『誤解とは？』

「言っておくがあれは故意ではない。森野に声をかけようとしたとき立ち眩みがしたのだ。それで足がもつれて、あやうく彼女を巻き添えにしそうになっただけにすぎない」

見苦しきは自覚していた。それでもしらを切るしかなかった。

『それならそれで結構です』

「いや、お前はそう思っていない。だからこんな形で電話をよこしてきたんだ」

『ならばあなたと電話をせず通報するでしょう』

何を当たり前のことをきいているのかと言わんばかりの少年の指摘だった。朝永にみじめな思いがこみ上げる。

そもそもこの少年は友人を介して拾った携帯を届けようとしただけなのだ。つまり、余計な行動に出てぼろを出したのは紛れもなく自分の方だ。おそらくその時に、電話をかけていた森野から話を聞いて、この少年は疑いを持ったのかもしれない。

そう考えたとき、ふと朝永の脳裏に疑問が浮かび上がった。

「ひとつ教えてくれ」朝永はたずねた。「お前は森野に電話した時いつたどこにいたんだ？ 約束では森野に携帯を預け、私に返却することになっていたはず。ならばお前は本来この駅にいないはずだ」

相手は音もなく聞いている。嫌な予感があった。

「だが携帯を置いたのはお前だろう。つまり、お前はこの駅のどこかにいて、森野の後をつける私の挙動を不審に思い、あの電話のタイミングでとつさに森野に指示したのだ。いや、そうでないと森野は避けられなかったはず。そして私が気を失っていた間に森野の元に駆け寄って、彼女から渡された携帯をベンチに置いた。違うか？」

『違います。そもそも僕は彼女に何も話していない』

「……………なに？」

予想外の答えに戸惑った。

『ですから、森野は何も知らないのです。あなたのことも、今日この場であなたに会い、携帯を返すという約束も。あれは僕の嘘です』

携帯電話を持つ手が震える。冷えた朝の空気が汗ばんだ全身の体温を急速に下げていくようだった。

「だが彼女は指定通りこの場に来ただろう」

『ええ、それだけは僕が指示しました。』八時半に電車が来るタイミングで電話をかける”とだけ事前に伝えておいたのです。それだけです。あなたが狙いやすいような位置に森野が来たのも僕がわざと指示しただけです』

違和感があった。そもそも森野は、預かった携帯を、やって来た朝永に返すはずだった。

しかしあの時朝永を見た森野にそんな気配はなかった。

『それに、言ったでしょう。森野には異常者をおびき寄せられる体質があると。以前から彼女をストーキングしていたあなたがそうでないとは限らない』

いま、ようやく合点がいった。

携帯を紛失したのも、その後電話をかけてきた少年が森野の名を口にしたのも、全てはあの少年の仕組んだ罠だった。はじめから誘導さ

れていた。あの少年は自分の本当の企みを知り、罠にはめるつもりでいたのだ。

この少年はいつ察知した？

十一月、携帯電話を手に入れた時から？

十月、森野を尾行し続けていた時から？

九月、森野を特定する前から？

八月、森野をあゝの駅のホームで見かけた時から？

雨音の小さく響くホームの中で、なぜだ、という疑念が朝永の脳裏に浮かぶ。

「私をどうするつもりだ」

『何も』無機質な音声を耳にした。

「そんなはずないだろう」

『本当のことです。僕はあいにく正義というものに興味はない。電話をかけたのも、ほんの少しだけあなたと会話をしてみたかったからです。ただ、一つだけ約束をしていただきたい』

「約束？」

『簡単なことです。今後いつさい森野を狙うのをやめていただきます。あなたが願望を満たそうと誰を狙おうがどうでもいい。しかし彼女を狙われると少々困るのです。その代わり僕も決してあなたに干渉することはありません。この取引をしていただければ、お互い無関係の他人になる。あなたはこれからも自由だ』

あの少女から離れる、という警告にほかならなかった。

「……もし断ればどうする」

あえてその問いをかけた。

『それでもあなたは承諾することになる』

「森野を守るために？」

『これはあなたのためを思つてのことです。それ以外の選択肢はない』

この瞬間、朝永の脳裏に一つの考えが浮かび上がった。

少年の口封じをしなければならぬ。

彼は邪魔な存在だ。表向きは約束を守ったふりをしながら密かに

彼を探し出し、すきをみて抹殺する。口約束に従う道理はないのだ。「どのみち生殺与奪の権を握られているのは私の方だ。きみを信用するしかないだろうな」

よく考えれてみれば、これは警察に通報するというただの脅しだ。屈した瞬間から、弱みを握ったこの少年に一生おびえて過ごすことになる。そんな不自由を甘受しなければならぬ。

夢を絶たれるわけにはいかない。ひるんではならない。朝永の心に再び意欲が湧き上がるのを感じた。

「わかった……誓おうじゃないか。私は二度と彼女に近づかないと」  
混濁した思考が一つの明確な答えに辿りつく。迷いはない。そして容赦はしない。

『……ところで朝永さん。先ほど携帯を置いたときにもう一つベンチの下に置いたものがあります。よければ確かめてもらえますか?』  
見ると、ベンチに座る朝永の靴の裏に、紙袋のようなものが横たわっていた。

中身を確認した。瞬く間に朝永の全身が凍り付いた。

「な……何故これを!」

『それですか? 携帯電話とともに拾ったものです』

「とぼけるな! これはお前の仕業だろう、どうやって手に入れた!」  
『さあ? 僕は拾っただけなので、誰がどこで入手したかなんて僕は知るところではありません。でもそうですね……誰かが不要になったから捨てたのだと思います。でもその証拠は見つからないでしょう。もしかしたら匿名で警察に届けられるところだったのかもしれないかもしれません』

得体のしれない恐怖をひしひしと感じる。

紙袋の中にあっただのは現像された森野の盗撮写真全てと印刷された朝永の日記全ページだった。コピーしたと思わしきディスクまで入っている。ディスクは透明なプラスチックケースに入っていた。

犯人は間違いないこの少年だ。だがどうやって手に入れたのだ。盗んだのか、遠隔操作でパソコンをハッキングしたのか。

しかし、より深刻なのは、朝永は何も手だしできないことだった。

もし警察に届けたら疑われるのは朝永の方だ。少年が盗んだ証拠を立証することはおそらく不可能だ。それどころか分が悪いのは自分だ。日記に姉の殺害をも記しているのだ。それをこの少年がリークすれば、迷宮入り事件の犯人を暴き出したと社会から称賛されるだろう。

少年の狡猾さに吐き気がした。

過去の記憶も、未来への意欲も、己の魂すら根本から驚掴みにされているのだ。

「い………いつたい、どういうつもりだ？」

『これは僕なりの親切なのです。僕にはもう不要なのであなたに全てお返ししようと思いました。安心してください。ほかにコピーなどしていないので………』

そういわれて誰が信じるだろうか。

『どうしました？』

「嘘だ」

『嘘、とは？』

「私のデータを抜き取ったのだろう！ ならば今もそれを持っているはず！ いつでも私を警察へつき出せるようバックアップをとるはずだ！」

電話の向こうで少年は呆れたようなため息をついた。

『僕にはもう興味がありません。あなたの好みや過去などどうでもいい………だから、いらぬものをあなたに返したというだけです。強いて言うならそれは約束の担保だと思ってください』

この少年はいつたい何者なのだ。わけがわからない。自分が殺人犯であるときえ知りながら、その決定的証拠を自ら手放すなど。頭が混乱してくる。

「そうまでして私に約束を守れと？」

『ええ』

「それは、森野を助けるためなのか？」

『ええ、彼女を失うのは勿体ない。なぜなら森野におびき寄せられる異常者を僕が観察できなくなってしまうから』

「お前はそのため自分の友達を危険に晒したのか」

『殺されるならそれも彼女の運命というだけです』

凍り付くような怖気がした。もうたくさんだった。この少年の底知れぬ悪意に。

どこまでも狡猾で、悪辣。そこには人間の持つ良心など欠片も存在しない。なにかどす黒い闇が人間の形を模しているとしか思えなかった。

関わってはならない。本能がそう告げる。夢は絶たれたのだ。

『まもなく、二番線の電車が参ります。白線の内側にてお待ちください』

少年との電話を切った。

憔悴した表情で辺りを見渡す。いつの間にか次の電車を待つ人で駅のホームがあふれかえっていた。帰ろう、と朝永はベンチから立ち上がり、一階の改札口につながる階段に向かう。

だれかが階段を上ってくるのが見えた。

朝永の視線の先にいたのは、ひとりの少年だった。

ふいに目が合った。

少年の瞳は無機質な闇に満ちていた。

その時朝永は理解した。

おそらく本当に彼は警察に暴露するつもりなどないのだ。こちらの考えなど見抜いている。その上で、少しでもこちらが約束を破る動きをみせたとき、それを口実に殺害を目論んでいるのだ。

『ご乗車ありがとうございます。間もなくドアが閉まります。ご注意ください。』

立ち尽くす朝永の横を通り過ぎた少年は、森野夜と同じ方面の電車に乗った。

警笛ののち、扉が閉まり、発車する。そうして再び、ホームに朝永だけが取り残された。

## 第12話：11月（土）

12

その後、待ち合わせた展示会場で森野は刺すような雰囲気をもとつていた。

「あれはいったいどういうつもりなの？」

何の話かわからないので僕はたずねてみたところ、電話をかけた時のことらしかった。

「なんなのよ、『気をつけろ。きみの背後からどうもうな犬が襲いかかってくるぞ』って。いきなりあなたが言うものだからびっくりしたわ」

「電話越しに危ない気配がしたんだ。きっと電車の走る音と犬のうなり声をきき間違えたのかもしれない」

「そう。おかげで後ろに並んでいた人にとっても迷惑がかかったわ」

話を聞くと、あのあと電車に乗った森野は盲導犬とカゴの中の小型犬にはさまれたらしい。混んでいたため場所を変えることもできず、乗っている間ずっと小型犬が盲導犬に吠えかかっていたという。

「これもあなたが不吉なことを言ったせいに違いないわね」

「僕に責任はないよ」

あの時、僕は最初から駅のホームにいた。朝永が改札口で待つよりも前に、同じ現場にいたことになる。

しかし彼が用心深く周囲を注意しても、遠くにいる僕の姿は見えなかっただろう。

なぜなら僕のいた場所は、朝永たちと真逆のホーム先端部分だったからだ。何事もなく展示会場行きの電車が駅に到着したことさえ確認できればよかった。

それに、朝永の挙動をいちいち見張る必要はない。僕のやったことは、八時半に電話を入れて、森野を飛びのかせる言葉をかけるだけだ。タイミングを合わせれば造作もないことだった。

ところで、森野を動かす言葉を思いついたのは、金曜日の朝に飼い犬のユカをみたときだった。思い出したのだ。森野の犬嫌いを。



皮肉にも、彼女は大型犬によって命を救われたことになる。

後日、僕は朝永の住んでいたアパートの住人から話を聞いた。

朝永はすぐに部屋を引き払ったらしい。聞くところによると、塾講師の仕事もやめて、どこか遠い町に移り住んだという。

今になって思う。もしかしたら、朝永の計画は本当に成功できたのかもかもしれない。

森野の運の悪さを考えると、彼が撮影に成功して警察の捜査を逃れ、自室でゆっくりと作品を鑑賞する未来がありえただろう。

実は、僕も最初そのつもりで計画を立てていた。森野のスナッフフィルムを見てみたいという思いは今も頭の片隅に残っている。

しかし、僕と朝永ではスナッフフィルムに対する好みの違いがあった。朝永は森野の絶望する表情を見たがっていた。けれども僕なら、電車に轢かれた森野の死体もじっくりと観察したい。

あの日の朝永にその映像を撮り収める時間はなかっただろう。撮影する間に人が駆け寄ってくるからだ。それに、僕の望む表情がきちんと撮れるとは限らない。

そう考えた僕は当初の計画を変更した。朝永に森野を諦めさせることにしたのだ。

結果的に、彼は最良の選択をしたことになる。

もし朝永があきらめの悪い男だったなら、その場合、文字通りの『排除』に向けて動いていただろう。僕は本棚の奥に大量のナイフを持て余していた。

また、約束の日に彼が警戒して駅に来ない可能性もあった。携帯の返却を後日にしてほしいと言いつつ出すことも考えられた。しかしこの場合、彼は別の意味でおしまいだった。なぜなら僕が朝永のデータを警察にリークするつもりだったからだ。彼の盗撮と過去の殺人を示す証拠として。それはそれで、大きな騒動となっただろう。

結局のところ、『森野を諦めて町を去る』のが彼にとって最良の選択なのだ。

「ところで、そんなひどい目にあったのによく家に帰ろうと思わなかったね」

僕は森野にたずねた。

「展示会の目玉を見たかったの。人間の目玉という意味ではなくて、スナッフフィルムにまつわるドキュメンタリー映像を流すと聞いて興味があったのよ」

「知ってるよ。ヨーロッパで二人の青年が起こした二十一人もの殺害映像を見た犯罪心理学者のインタビューだね」

「本物の映像を視聴できたなんて羨ましいわ」

森野はなにも知らない。あの駅のホームで後ろに並んでいた男の正体にも、自分がスナッフフィルムの被写体にされていたことにも、これからも気づくことはないだろう。

エピソード ― A Voice from the  
Grave ―

13

展示会の日から一週間が経過した放課後のことだった。

チャイムが鳴って、終礼を終えたクラスの生徒たちが散り散りに教室を離れていく中、日直の当番として残った僕は、ふと教室に残った森野に気づいた。

日の傾いた教室の中で彼女は席から離れず、机の上の地図をじっと見つめていた。そばには無地の用紙があり、森野はシャーペンを動かして見取り図を書き写そうとしていたようだ。僕が覗き込むと用紙は奇怪なシマウマ迷路に変わっていた。

図書室に行つて地図をコピーした方がいいよ、とアドバイスすると森野は顔を上げた。

「記念写真を撮りに行くの」

脈絡のない言葉の意図を、僕は知っていた。

これは少し先の話だが、十二月六日に森野はとある山奥を訪れるつもりだった。そこは昔、女子高生の死体が発見された場所で、近々ゴミ処理施設が建設される予定だった。森野は原形をとどめているうちにその現場を訪れ、記念写真を撮るつもりでいた。

なぜ僕がそのことを知っているかという点、僕もそこに向かうつもりだったからだ。

「それにしても、このところずいぶん活動的だね」

僕は森野にたずねた。率直な疑問を口にしたのだが、どうやら向こうには思う所があったらしい。軽く息を吐き出し、自分の机にうつむいたままだった。

沈黙が生まれた。

僕はその沈黙を利用して、黒板消しの粉をはたくために窓を開けた。白い粉が教室に逆流しないよう風の流れを読んで黒板消しを叩く。

「この前した話、覚えてる……?」

今度は言葉の意図がわからなかった。僕は想像力を働かせた。

「化学講義室できみが見た夢の話?」

窓を閉じた僕はあてずっぽうに答えた。彼女はうなずいた。どうやら正解を引き当てたようだった。

「……ときどき不思議な夢を見るの。いつか、わたしの命が突然だれかに奪われるんじゃないかって。あの夢に出てきたお墓の下に引き込まれるような気がして……」

僕は森野の言葉を注意深く伺った。

「でも、わたしはきつとそれを拒むことができないと思う」「どうして?」

長い沈黙が流れた。それでも僕は待った。彼女が何か言葉を出そうともがいているように見えたからだ。

「わたしに姉さんがいたこと、知っているよね?」

僕はうなずいた。彼女にはかつて双子の姉がいた。かつて、というのは既にこの世にいないことを意味する。姉はどこか遠い墓の下に眠っていた。

「ときどき、もし姉さんが生きていたらと思うの。その日は永遠にこないけど、それでもわたしは姉さんとうまく仲を保っていたのかなって」

森野は深く息を吸ってわずかにうつむく。長い黒髪に覆われて表情は見えない。

「でも、わたしはあの時……自分を隠して『森野夜』として生きていくとした時から、ひどい嘘つきになったわ。姉さんのお墓には『本当の名前』さえ刻まれない。わたしは姉さんを裏切ってしまった」

森野の放つ声は微かな悲しみを湛えていた。

「そんなわたしを姉さんは決して許しはしないでしよう。だから、きつと今も、あの夢に出てきた墓の下からわたしを呼んでいる……そんな気がするの」

言い終えると、森野は窓の外を見やった。いつのまにか日が落ちて、窓ガラスの向こうは闇に覆われていた。冬の訪れを感じさせる。

僕はこれまで森野に降りかかった災難の数々に思いをはせた。おそらく、これからもその宿命は続くのだろう。

「僕は前にも言ったはずだよ」

日直の仕事を終えた僕は言った。

「その墓に眠るのは、きみとよく似た別人だ。似ていても、それはきみ自身ではない」

自分の席に戻って鞆を手取る。森野はゆっくりとこちらに顔を向けた。いつものような無表情の内側に、心なしか柔らいだような感情が見えた。

「おかしなことを言ってごめんなさい。それでもせめて、わたしは悔いなく生きようと思うの」

「そうしたいならそうすればいい。きみの自由だ。でも、もしきみが死にたくなつたなら、その時は……」

……僕が殺してあげる。

最後にそう森野に言い残し、僕は教室を離れた。

家に戻り、僕は自室の本棚からナイフセットを取り出した。

そのうちの一本を選び取る。静けさに包まれた部屋の中で、それは変わらぬ輝きを放つ。

巷では新たな殺人事件が起きていた。殺害されたのは北沢博子という女性だ。遺体と同じ市内の廃墟で見つかったことから、殺人犯がこの近くに潜んでいる可能性はあった。

つまり、その人間が次の標的に森野を狙う可能性も十分にありえた。

周りを注意深く観察していれば、きっと犯人に出会えるにちがいない。

枯渇するナイフの声が僕には聞こえた。(終)